
甘くて苦い少女たち

戸塚夢葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘くて苦い少女たち

【Nコード】

N6464Z

【作者名】

戸塚夢葉

【あらすじ】

普通の学園生活を望む、霧谷和也。しかし、その周りの女子のせいで現実以上の甘い日々を送ることになる。和也の事が好きになってしまう人が増え、和也は誰と付き合うのか？

いつも通りの日々……のはずが!?

高校入学して1ヶ月。

ここまでは普通の人生。

オレ、霧谷和也の人生はここから桃色、否、黒色に変わっていった。他の、思春期の高校生ならこれを見て羨ましがらるだろう。

人の気も知らないで、と思う。

オレは、普通の暮らしがしたい。

金持ちでもなく、貧乏でもなく、ごくごく普通の一般家庭にあこがれる。と言っても、まだまだ先の話だが……

「今日も生きていられるかな……」

高校生の発する言葉じゃないことは十分わかる。

だが、心配なのだ。

ほら、また遠くから悪魔の怒声が聞こえる。

「コラー……!!カズ……いつまで寝てんの!？」

うるさいなあ、と呟き家を出る。

「今日も、朝っぱらから無駄に元気の多いことで」

言った瞬間、鳩尾にパンチが飛ぶ。

ぐふっ、と吐いた。

「ったく、無駄とはどーゆ事!?無駄とは!」

「そうか、無駄という言葉の意味も知らないか、だったら辞書を開き……」続きを言おうとしたら殴られた。

「死んで生き返れ」

酷い言葉だ。

今日も生きていられますように……

地面に這いずりながら神様に願う。

そもそも、可愛い顔してこんなことを言うなんて、外見と内面の差がありすぎる。そのことを知っているオレは、この幼馴染の少女、柏木優奈に対して、恐ろしい、怖いなどの黒い感情を抱く。しかし、

この内面を知らない馬鹿共は、可愛い、好きなどという命知らずの感情を抱く。

学校に間に合うために少し早歩きをする。

オレが通っている、帝都学園では俺らは付き合っているということになっていた。必死に説明してようやく、噂が収まり、普通の学園生活を送れそうだ。

あのかきは酷かった。オレも被害者なのに、殴るところか蹴られてしまった。死ぬかと思ったよ。

一緒に登校は、なんか普通って感じ。

幼馴染だから、別になんとも思わないし。

今日は、一緒に登校はしてない。なぜなら、さっき殴られ、地面を這いずってる間に行ってしまったからだ。

校門を過ぎ、教室に入った。

ここでまた悪夢が訪れる。

いつも通りの日々．．．．のはずが！？

ガラガラガラとドアを開けると、目の前に汚い泣き崩れた顔が近づいてくる。

「おわっ！なんだなんだ！？」

そう言ったのが聞こえたのかどうかわからなかった。

「和也ー」

泣きながらオレの名前を呼ぶ。

こいつは、鈴木祐樹。

オレの数少ない親友だ。

なにしろ、学園のアイドルらしい優奈と仲がよく幼馴染という位置のオレは恨まれることのほうが多かった。

祐樹の場合、ネットの中で生きてるので嫉妬心というのは微塵もなかった。

その祐樹が泣き崩れている。特に珍しくもないが一応聞いてみた。

「どうしたんだよ？まずは鼻を拭け」

そう言っつてハンカチを渡した。このハンカチは二度と使えないな．．

．．．

それから少しして、口を開いてくれた。

「朝にね、お前の幼馴染の柏木に、『オイ！お前の彼氏の和也君はどうしたのかなあ？』って言った瞬間に顔面にね、拳が飛んできたの」

そうか、自業自得だ。

助ける気など埃の様に去った。

その直後、後ろから鬼を纏った少女が来た。

もちろん星奈である。

「アンタ、こいつにどーゆーしつけしてんのよッ！ちょうどいいわ。アンタら二人とも．．．」

言い終える前に俺たちは教室から出て行った。

もちろん、速攻で捕まりボコボコに．．．
朝から体力が消えた。

当分、星奈の怒りは消えそうにない。

そして、また祐樹が命知らずな事を言った。

「アイツのスカートの中盗撮してくる」

知らんぞ、とだけ言って祐樹を見送った。

見たいわけじゃないよ？いや、思春期だし．．．見たいかなあゝ
そんなことを考えているうちに、祐樹が携帯を取り出す。

机の陰に隠れ、シャッター音を鳴らす。

バカだな．．．

光と音出てるよ。

当然、その直後に祐樹はボッコボコ。

享年十五歳。

ご愁傷様で。

それだけならよかった。

優奈がオレのほうに向かってくる。

「ゆ、優奈．．．？」

聞こうともせず、腹にフック、顎にアッパーそしてとどめに踵落とし。

死亡時刻 午前八時二十五分。

それから、オレは気を失い、気づいたら保健室のベッドの上だった。

「お目覚めですか？」

傍から優しい声が聞こえた。

誰だろう？

起き上がって見ると、そこには黒い髪の綺麗な人がいた。

いつも通りの日々……のはずが!?

起き上がるとそこには黒い髪で長くストレートの女子がいた。

「ここはどこだ?」

辺りを見回しているオレに声をかけてくれた。

「保健室ですよ。大丈夫?」

心配されていた。

そういえばオレは、優奈に殴られ気絶して……ってことはずっとここに!?

「あの、今何時……ですか?」

ふふっ、っと笑ってその子が答えてくれた。

「もう4時ですよ」

にこにこしながら答えた。

4時……ってオレは朝からずっと寝てたのか!?

情けねーと思しながら、起き上がる。

そして、今更だがオレを手当てしてくれた人にお礼を言った。

「あの、ありがとうございます。失礼ですけどお名前は……?」

にこやかなまま答えられた。

「私は、櫻井紫苑。2・3です。」

へえー2年なのかぁとオレは言った。

「に、2年!?!」

驚いたオレはすぐさま謝った。

「すみません!2年生とは知らず、失礼を……」

「いいんですよ。すぐに言わなかった私にも非はあります」

なんていい人なんだ。星奈とは大違いだ。

にしても、情けない。

女の攻撃で約8時間も気絶するとは……

今すぐ、家に帰ろう。

「あの、ありがとうございました。帰ります」
そう言つて、保健室を出た。

お大事に、と紫苑先輩は言ってくれた。
優しすぎる先輩、この出会い方はまさに2次元世界!!!
若干、興奮したがすぐに溜息とともに消え去った。

校門の前に優奈が立っていた。

「遅い！いつまで待たせるつもり!?」
顔を赤くして後ろを向きそう言った。

「お前がそうしたんだろ」
地雷を踏んだ。

「アンタが弱すぎんのよ!!!」
やばい、と思つてすぐに謝りお礼を言った。

「悪かつたよ。でも待つててくれてありがとう」
ん？優奈が耳の後ろまで赤くなつてるぞ？

女というものはよくわからない。

「そ、そんなことより！早く行きましょ！バイトしなきゃ」
そう、オレの家はパン屋だった。

一見、地味そうに見えるがかなり難しい。

わけあつて、優奈がバイトとして手伝つてくれるのだ。

店の名前は、「ベーカリーブレッド」

なんか、めっちゃくちゃだった。

そりゃそうだ。だつてオレの姉貴が付けたんだもん。

店の前に着きドアを開けると、いきなり視界に巨乳が……

「遅かつたな」

いきなり目の前に現れた。

「おわっ！」

「おわっ！とは何だ！人の顔を見るなり！」

そういうわけじゃないよ姉さん。いきなり現れたからしょうがない
つて。

「おお！優奈君。来てたのか。入りたまえ」
お邪魔します、と言って優奈が入った。

いつも通りの日々……のはずが!?

黒くて長く真っ直ぐな髪。男勝りな口調、性格、そして……この巨乳。間違いないオレの姉さん霧谷遙だ。これだけはいつも変わらないのでほっとする。

姉さんはパンを焼くことだけは一流だが、この店の名前のせいで随分損をしている。しかし、変えるつもりは毛頭ないらしく、仕方なく今のままで続けている。

「何をしてたのだ? いつもならもつと早い筈だ。」

「どうやらオレ達が遅いことに腹を立ててるらしい。」

そんなことを考えているうちに優奈が口を開いた。

「ずっと気絶してたんですよ」

はあ、と溜息をつきながら言った。

「あれは、お前が悪いんだろ!」

優奈は赤くなりさらに反論してくる。

「アンタが弱いんですよ!」

「お前が強すぎんだよ! このゴリラ!!!」

ゴリラという単語を聞いたとき、一瞬にしてオレの急所に膝蹴りが

「ぐほおっ!」

本日3度目の死の危険性。

そして、お決まりの台詞。

「死んで生き返れ」

冷酷無比な奴だ。

もめていたオレ達を、姉さんが止めてくれた。

「まあまあ、よさないか。仲がいいのはわかったから。まるで夫婦みたいだな」

この一言がさらにオレを突き落とす。

ふふっ、と笑ってどこかへ去って行ってしまった。

「そ、そ、そ、そそそ、そんなんじゃないです!!!」
顔が真っ赤になりながら、俺に向かって拳を振るう。

何故だ……オレは悪くないのに。

なんとか生き返り、やっとバイトを始められる。

「遙姉さん。そろそろ店やばいよ？ずっと赤字で倒産すんぜんだよ」
そう、現に優奈のバイト代でさえ払えていなかった。いつでもいい
とは言ってくれているがさすがに申し訳ない。

最近では、パンの種類が同じだから客が減り姉さん目当てや優奈目
当ての客ばかり来る。それでおまけに買っていく、という感じで少
しだけ売れる。

それだけだから当然赤字だった。

「ふむ……なら新商品を開発するか」

おおっ、とオレは反射的に言った。ここまで真剣になってくれたの
は久しぶりだ。ついこないだまで、ずっと家でネットしかしてな
かったから。姉さんはネットオタクだ。だから祐樹とも気が合う。

ずっと黙り込んでいた優奈がやっと口を開いた。

「季節の商品を入れたほうが売れると思うわよ」

さすが、優奈というところだろう。真剣に考えてくれてるだけでも
ありがたい。

「では、新商品を今月中に最低3個作る。一人1個アイデアを持っ
て来い。」

新商品についての会議が終わり、いつも作るパンに取り掛かった。

いつも通りの日々……のはずが!?

午前9時55分。

やっと作業が終った。

パン作るなんて1週間ぶりくらいでこれからはしっかり作ろうと思う。でないと、姉さんはネットゲーのために店まで閉めかねないからだ。

姉さんの人生はゲームとパンでできている気がする。誰か見張り役がほしい。そろそろ真面目に店がやばいのだ。

「いい姉さん。これからはしっかりとパンを作ってね? 経営やばいんだから。じゃないと…….ゲーム禁止にするよ!」
これ効いたのかどうか、姉さんの表情が変わった。

「貴様、私のゲームを取り上げるつもりか? そんなことをしてみろ。した瞬間貴様の首を…….」

言い終える前に「はいはい」と言って優奈が流してくれた。完全厨二病だよ姉さん。

「でも、ちゃんと姉さんが考えて経営が安定すれば、ゲーム買えるよ?」

この一言でかなりやる気出した。嬉しい反面悲しくもある。情けない。

「見ている。私が本気になれば経営なんてすぐ右肩上がりだ」

「期待してるよ姉さん」

そう言っつて、今日の仕事は終了。もう10時を過ぎていた。

「優奈。もう遅いから送るよ」

「えっ、いいわよ別に! 平気に決まってるじゃん!」

そこまでして強がらなくても。

「じゃ、外出てみれば?」

言われたとおりに優奈が外へ出る。

辺りは一面真っ暗だった。

かなり優奈が震えていた。だから言ったのに。

「ほらな。行くぞ」

それでも、素直にならないのか、まだ平気と言っている。

「ただ、大丈夫よ！で、でも折角だから一緒に行ってやるわよ！」
素直じゃない奴。オレは苦笑しながら出た。

夜の道は慣れているがさすがに怖かった。いつも以上に暗いし、自転車のブレーキ音にも少しビクつとする。優奈はそれ以上の反応をする。

店から優奈の家までは、約15分ほどで着く。

5分程歩いたところで優奈が寄ってきて、手を組んできた。

「なっ、何してんだよ……」

いくら幼馴染とはいえ、オレは思春期まっしぐらの高校生。これでドキドキしないほうがおかしい。

「しょうがないでしょ……怖いんだから」

よほど、辛いのだろうな。あの、悪魔で巨乳美人（といっても遙姉さんほどじゃないが）の優奈が怖がるとは。一応、人間らしい。

手を組んでからどれほど歩いたのだろうか。優奈は、すてすてと早く歩く。

「ゆ、優奈。もう家過ぎてるぞ」

気づいたら優奈の家より500mくらい進んでいた。「知ってるわよ！」と言っただけ。

家の前に送ったところで、オレは帰ろうとする。しっかりと優奈が玄関の前のドアを越えるまで見送る。ドアを開け、こっちを向いて、「ありがとね……送ってくれて」と言っただけでドアを閉めてしまった。素直なところもあるんじゃないか。
オレも家帰って寝よう。

姉さんのゲームもほどほどにさせなきゃ。

いつも通りの日々……のはずが!?

いつも通りの朝。窓から朝日が流れ込む。いい朝だ、と思いたかった。だが、衝撃の事件が起きた。

それは……

オレが姉さんに起こされた事だ。

は?と思う人もいるかもしれないけどこんな事初めてだ。

起こすなら毎日だけど、起こされるなんて……

「オイ!起きろ!」と言いなながらフライパンとおたまでガンガンやられては起きるしかない。

朝起きて、テーブルに着くとすぐくしつかりした朝ごはんが用意されていた。しかも、毎朝オレが用意するのだが今日は姉さんが用意してくれた。感激して涙が出そうだ。

さらに、今まで見たこともないパンが用意されている。

「姉さん、これは?」

こう言うと、ふっふっふと笑いをあげた。

「これは、昨日徹夜で考えた新作だ。見ろ!徹夜だからクマができたクマが!」

と言って、強調されても困るんだけどなあ

でも、以前の姉さんからは信じられない行動だ。どんだけゲーム欲しかったんだろう。

用意された新作のパンは5個。正直、朝ごはんとしてはかなり多いがせっかくだから食べよう。

まず、パンダの顔をしたパンを食べた。中に生クリームとクリームが入っていてかなりおいしい。餡子が入ったものもある。

さらに、具がかなりあるピザパンも作っていた。一見普通だが、味は一流。その他にもいろいろおいしいのがあり、全て商品化することにした。

こんなに、おいしいパンを作ってくれてとても嬉しい。今まで、こ

んなに真面目にやったことはなかったのに。

「どうだ？うまいか？」

心配そうに聞いてきた。

「おいしいよ！本当においしい！！全部商品化しちゃおう！」

遙姉さんの顔が満面の笑顔になり、巨乳に顔を押し付けてきた。

「く、苦しいー。死んじゃうよ遙姉さん・・・」

「おっ！すまんすまん」と言って放してくれた。もう少し押し付けられても良かったかななんて。

問題はあと1つ。

どうやってこれを、アピールするかだ。いくらおいしくても存在がわからなければ買う人はいない。そこで、HPを作成したり、町にチラシを配ったりして存在を見せ付けた。

そのおかげで、とんでもないほど売れて今となっては毎日客がたくさん来る。以前のように、姉さんや優奈目当てで来る人は少なくなつたのが嬉しい。

かなり売れたので、今では経営も安泰だ。やっと右肩上がりした。だが、覚えていたのか「新作の、モンスターファンタジープラネットを買ってこい」と言われた。だから、店の金は増えてもオレの財布はすっからかんだ。あんな約束しなければよかった。

だけど、そのおかげで姉さんが真面目に取り組んでくれた。それだつたら安いものだ。

まあ、こんなんで気づいたらもう夏だった。

いつも通りの日々……のはずが!?

夏休み。それは普通の高校生なら遊んだり、部活で過ごすだろう。

オレみたいに家業をする高校生はどれほどいるのだろうか。別に嫌ではない。むしろ楽しい。だけど、さすがにオレでも遊びたいと思うときはある。せめて、1日だけでも皆と楽しく過ごしたい。それを、思い切って姉さんに伝えてみた。

「いいよ」の一言で終わった。

「えっ?店はどうするの?」

「そんなの私に任せときな。高校生は遊べ」

驚いた。まさかこんなに簡単に了承してもらえらるとは。でも、姉さんが仕事してオレが遊ぶのは何か申し訳ない気がする。ん?まさか、遙姉さんはこの気にゲームする気じゃ……。顔がめっちゃニヤけていた……。

「姉さん!ゲームはほどほどにね!」

わかってるよ、と言って自分の部屋へ去っていった。

オレも学校へ行こう。

教室に入ると、「和也君!」と言う声が聞こえた。

「なんだよ。また優奈か……?」

振り返ると、茶色いショートヘアの女の子が立っていた。少なくとも優奈ではなくこの人物は優奈の親友の川崎恵がいた。

「なんだ。恵か。何か用か?」

恵は、ちよつと顔を赤くして言った。

「あの、……その……」

こんな感じで沈黙のまま。

そこに、優奈が現れた。

「早く言っちゃいなさいよ」

優奈はニヤけながら言う。

「和也君は夏休み空いてるかな？」

驚いた。これが運命と言うやつか。さっき、休みをゲットしてすぐに用事ができるとは。

「少しだつたら空いてるよ」

「じゃ、その．．．海にでも行かない？」

海？これはヤバいだろ．．．オレは思春期だぞ。女の水着なんて見たら．．．

この考えを見通したのか、優奈がこう言った。

「恵一人で行かせるわけにはいかないわ。私も行くから」

別に着いていきたいわけじゃないんだからねッ、と付け足してね。そこへ後ろから、祐樹が現れた。

「お前も行きたいくせに」

ば、ばか、んなこと言ったら．．．

「死んで生き返ってまた死ね！！！！」
踵落しがキレイに決まる。

やっぱりこうなると思ったよ．．．

地面に這いずりながら祐樹が言った。

「オレ達も行くぞ．．．」

そう言ったら、体つきのいい男が出てきた。

「俺たちも暇だな。男三人というのもアレだしな」

もうオレは入ってることになってるのか。

この男は、笹川大輔。

空手と柔道を嗜む、武道男だ。

でも、心は優しくオレの親友でもある。

「ちょっとアンタ達！勝手に決めないでよね！！」

そんな怒ることでもないだろうに．．．

「なあ、コイツらも一緒じゃダメか？男一人つてのもアレだしさ」
そう言ったら恵も共感してくれた。

「そうだよ！人数多いほうが楽しいし！」

二人に言われ、仕方なくと言う感じだが優奈もOKした。しかし、優奈は、

「でもさ、男3人女2人よ？これじゃ人数合わないじゃない」
誰か、誘えそうな人を考えてみる。
頭に浮かんだのは紫苑先輩だった。

あれから、何度かお礼に行き今では結構仲がいい。それに、あの人は後輩から慕われている最高の先輩だった。

「もう一人はさ、先輩でもいいのか？」

この言葉に、優奈と恵は驚いた。

「誰なのよ！」

「紫苑先輩」

もつと驚かれた。というより仲がいいことに驚かれた。

「コイツはついに先輩にまで手を出すか。この裏切り者オ！」

この一言から、優奈がキレてオレのほうに寄る。

「和也ーーーーー！！！」

「ち、違うって今のは祐樹の嘘で……」

なんて言ってるうちに優奈のパンチで吹っ飛ぶ。

「まあ、許してやってくれ。祐樹は和也に嫉妬しているのだ」
してねーよ！と祐樹は言うがな。

いつも通りの日々……のはずが!?

オレは、放課後保健室へ向かった。

ドアを開け失礼しますと言うと、そこには紫苑先輩がいた。

「こんにちは桜井先輩」オレはどうしても本人の前だと苗字で呼んでしまう。

「紫苑でいいですよ」

にこつとしながら言ってくれた。

「は、はい！紫苑先輩」

ちよつと真面目そうな顔になり、オレに質問をしてきた。

「今日はどうしたのですか？何か悪いところでも？」

「いえ。まだこの間のお礼をしてませんし、もしよろしければ夏休みに海へ行きませんか？」

紫苑先輩の顔が晴れ晴れとした。

「まあ！嬉しいです！ぜひ行きたいです！」

よかった、と思っていたらいきなり紫苑先輩が顔を近づけてきた。

「せ、先輩……？」

な、な、なんだこりゃー！！危険、危険すぎー！！

顔と顔の距離がもうほとんどない。このままキス…….と思っていた。これ、どう見ても現実じゃねー、ゲームかゲーム？いや、夢？やばい、落ち着けー落ち着け。

「くまたん」

へ？

「くまたん！」

オレの制服のピンを指差して言った。

制服のピンがこれしかなくてくまのやつを付けている。

いきなり紫苑先輩が抱きついてきた。

「ちよつ、ちよつと！先輩！落ち着いてください！！！」

しかし、何を言っても「くまたんだあ〜」としか返ってこなかった。

こんなところを誰かに見られたら．．．
そう思っていたらいきなりドアが開いた。
優奈が入ってきてしまった。

沈黙が流れ、優奈はふるふる震えている。

「こ、この馬鹿和也ー！！！！死んで生き返って死んで生き返って死
んじゃえー！！！！」

何発もパンチされオレは気を失った。

起きてから事情を説明し、何とか納得してもらえた。だけど、「紛
らわしいのよ！」と若干まだ怒っている。

そして紫苑先輩は極度のくま好きらしい。くまを見るともう一人の
自分が出るとかどうとか．．．

まあ、なんだかんだで一件落着。

いつも通りの日々……のはずが!?

行くのは、オレ、祐樹、大輔、優奈、恵、紫苑先輩の6人だと思っていた。しかし、結局的には紫苑先輩が2年生一人というのはちょっと、という事なので紫苑先輩の同級生の零条茜先輩も来ることになった。しかも、その茜先輩は紫苑先輩と正反対の性格の持ち主で、超明るくかなり男っぽい感じの人だった。まあ、男勝りなら遙姉さんも負けてないけど。

行く場所は、沖縄まで行くこととなった。ちょっと遠いし大変そうだが、楽しめればいいや。行く前に、優奈にはバイト代を渡しておいた。中々貰ってはくれなかったが、姉さんの恐怖により貰ってくれた。最近は客も安定してるのですこしくらいなら贅沢をしても平気だ。だけど、あまり贅沢する気には慣れなかった。姉さんが待っているから。

そして夏休み前日。

「明日から沖縄かあゝ5日間の旅!あつちで限定フィギュア買いまくってやるぜ!」

祐樹の声が廊下に響き渡る。オレは他人のふりをした。

「そんなもの秋原葉行けば買えるだろう」

大輔の言っていることは正しい。けど「秋原葉」じゃなくて「秋原」な……。

一方、優奈は、かなり張り切っていた。和也と近づけるチャンスなんてめつたにないんだから。

そして、二人きりでラブラブになんて考えていた。

「でも、恵も和也のこと好きなのよね……」

ライバル出現は正直親友とはいえ切なかった。それに、協力すると言ってしまったから協力しなければ

ならない。こういうときに自分の素直じゃないところを責める。

恵のほうも複雑な心境だった。

絶対、優奈は和也君のこと好き。そう思っていた。なのに、わかっているのに協力してなんて言ってしまった自分が恥ずかしいし最低だ。

「私、最低だなあ．．．」

言わなきゃ、と優奈と恵はどっちも思っていた。自分の気持ちをはっきり伝えて堂々と戦う。それが大事なのに、中々言い出せなかった。

放課後の帰り道、優奈と恵は偶然出会った。

「あのね！話があるの」

思いつきり被った。二人ともはいどーぞ、と言ったがどっちも言わない。

「は、早く恵からいいなさいよ」

「優奈から言つてよ」

こんな感じのやり取りで30分経過。

もう埒があかないと思ったのか優奈から口を開いた。

「あ、あのね、こないだ．．．協力するって言っただでしょ？私、和也のこと好きだからできない！ホントごめんなさい！」

でも、友達でいて欲しい、と泣きながら優奈は言った。

「当たり前でしょ。わかってるよ和也君の事好きなのは。こっちこそわかって言っただ。最低だよ。こっちこそごめんなさい」

「いいの悪いのは私のほうだから！」

「ううん！悪いのは私」

「私って言つてんでしょ！」

「うるさい！！悪いのは私なの！！」

そこに偶然通りかかったオレは二人の口げんかを見つけて、「オイ、やめろ！」と言ったら「うるさい！！」「と口をそろえ言われ、二人の強烈なパンチを食らった。

オレが何をしたんだ．．．。

優奈と恵は、ライバルであり親友であり。

二人とも、笑顔で帰っていった。
オレだけ、苦しそうだが・・・。

いつも通りの日々……のはずが!?

時は遡り、場所は保健室。

中にいるのは紫苑と茜。

「紫苑が認めるなんて、そうとう面白い子なんだあ〜」
茜が笑いながら言った。

「うん。すごく優しくて面白いよ。」
じーっと茜が紫苑を見つめ、聞いてみる。

「もしかして、紫苑ってその和也って子好きなんじゃないのー?」
すると一瞬で顔が赤くなり、動揺する。

「ななな、何言ってるの!そそそ、そんな事……」
あははは、と笑う茜。

「やっぱりね〜分かつちやったあ〜」
「内緒にしてよ……」

わかってるって、っと言って肩を思いっきり叩いた。

「でも、そんない子ならアタシがとっちやおうかな」
それ聞いた瞬間に、紫苑が立ち上がり、

「絶対ダメ!!!許さない!!!」
「やっぱ、好きなんだあ〜可愛いねえ〜」

冗談ということに気づいて本気になった自分が恥ずかしい。

飛行機で和也の争奪戦！？

今から、5日間旅行だ。待ちに待った旅行である。

「えっと、財布はあるし、着替えもある。カメラもある。まあOK
だろ！」

遙姉さんはずっとネットゲーで遊んでいる。

オレは溜息をつきながら、「いい姉さん？ちゃんと店番して、ゲームはほどほどにね？」

「わかつている！！お土産待ってるぞ」

姉さんはPCから目を話さずに言った。

しかし、いきなり立ち上がると、筆笥をゴソゴソあさりだした。取り出したのは、デジカメだった。

「私へのお土産に、和也たちが楽しく遊んでいる姿を写真に撮ってきてほしい。それが私の一番の思い出となるからな」

姉さんは顔を赤らめて言った。

「わかった。最高の写真を用意するから！！」

「ああ。行ってこい」

行ってきます、と言って家を出た。バス停まで10分程度歩き、何回か乗り返して空港まで向かう。時間も全然余裕があった。

空港に着き、待ち合わせ場所まで向かう。すると、まだ時間より30分以上早いのに茜先輩がいた。

「おはようございます。早いですね先輩」

にこつと笑って、「おはよ！いや〜時間間違えちゃってさあ〜」

それにしても誰も来ない。二人で気まずい空気が漂う。さすがに耐えられなくなったオレは、茜先輩に聞いてみた。

「先輩、朝飯食べました？」

そうしたら、うつんと言ってお腹がなった。

「この時間じゃどこもやってないですね。ウチのパンでよければ食べますか？」

「うん!!!食べる食べる」

オレは鞆から取り出し、茜先輩に渡した。

食べてみると「おいしー」と何回も言ってくれた。

「それ、オレの姉さんが作ってくれたんですよ。」

茜先輩は驚いたように顔を上げた。

「へえ〜お姉さんいるんだあ〜そうとううまい人なんですよ〜」

オレは苦笑しながら答える。

「ええまあ。普段はゲームばっかやってるんですけどね。でも、や

る時はやるし、信頼できる姉さんですよ。」

「お姉さんのこと大切にしてるんだね」

オレは、少し黙ったがこう言った。

「たった一人の・・・家族ですから」

飛行機で和也の争奪戦!?

何を言ってるんだオレは……

「たった一人の家族？」

茜先輩が聞いてきた。

「ええ。オレが小学生の頃親が他界しました。交通事故で。それ以来姉さんと二人で生きてきたんです。姉さんは、あれ以来泣かなくなった。それどころか強くなるうとした。オレの為に……」

少し茜先輩は悲しそうな顔をした。これ以上言うのは止めておこう。「すみません。楽しい旅行前に言う話じゃなかったですね。忘れてください」

「ううん。いいんだよ。でも今は辛くないでしょ？みんながいるんだし」

いつも通りの笑顔を見せてくれた。

「ええ、もちろんです！」

気づくともう約束の時間に近づいていた。すると、皆が来た。

「やつほおー！」

茜先輩が大きく手を振る。皆は小さく手を振った。

「おはよう。和也君」

恵が顔を赤くしながら言った。今日の恵は服が派手で、少し化粧もしている感じだった。

「ど、どうかかな？似合う？」

もう顔がかなり赤いよ。なんだかオレまで顔が赤くなる。

「う、うん。すっごい似合ってるよ」

恵は顔を赤くしたまま微笑んだ。

紫苑先輩が若干不機嫌そうだった。紫苑先輩は白いワンピースに麦藁帽子。こちらもかなり可愛い。

「お、おはようございます。紫苑先輩。ええと、その……すごく似合ってますよ」

紫苑先輩まで顔を赤くして、にこやかな笑顔を見せてくれた。そして、今度は恵がぶすつとした表情を見せる。

それよりも優奈がまだ来てないことに気づいた。あの優奈が遅刻なんてめずらしい。何かあったんじゃないかと心配する。

「優奈はまだ着てないのか？」

「大便でもしてんじゃねーの？」

祐樹が笑いながら言った。すると後ろから祐樹の頭にラリアットが飛ぶ。

「誰がするか！」

優奈が着た。ゼーハー言ってるよ．．．走ったんだな。

それにしても、今日の優奈は可愛すぎるだろ。幼馴染で、悪魔の性格を差し引いても可愛い。

「遅れてすみません！」

すると茜先輩が口を開いた。

「ちょっとゆうちゃん！遅いよおー。でも、その格好からして、和也君にどんな服見せるか迷ったんでしょ」

すると優奈がかなり動揺して顔をトマトみたいに赤くした。今日の優奈は肌の露出が多いな。

「そそそそ、そんなことないですよ！ちょっと、道に迷っただけで．．．」

「バス一本で行けるぞ」

大輔が口を開いた。確かに、道に迷ったというのはうそだろう。

ニヒヒツと笑って茜がオレに聞いてきた。

「今日のゆうちゃんどう？」

オレに聞くのか．．．えっとどうしよう。

「肌の露出が多いですね？」

優奈がこれ聞いたときに、鬼にして、

「二回死んで来いー！！！！」

5mくらい吹っ飛ばされた。沖繩に行く前から、重症だ。やっと飛行機に乗れる。

そう思っていた。

だけど、思いも及ばない事が起こった。

それは……

飛行機で和也の争奪戦！？

飛行機に乗り、出発までまだかなり時間があつた。
なにやら、女3人がもめてるぞ？

優奈、恵、紫苑先輩がもめていた。

どうやら座席でもめていたらしい。

「どこ座つてもいいじゃん早く座りなよ」

一斉に、オレの方を向いて

「くくうるさい！！！！」

と言われた。さすがに3人から言われると怖エー

さらにわかつたのがオレの隣に座るのが誰かということらしい。
すると後ろから祐樹が声をかけてきた。

「オイ！お前だけ3次元を堪能しやがって！変われコラ！！」

知つたことが、と思つたが、

「お前は2次元で生きてるんだろ？」

これには何も言えまい。ふっ、オレの勝ちだ。

大輔の隣には、茜先輩が座っている。どうやら3人に気を遣つたら
しい。

「恵があそこの席に座ればいいでしょ！」

指定したのは祐樹の隣。

「無理だよ！あんなところ！私は和也君の隣に座るの！」

「和也君の隣は私のもんです。誰にも渡しません」

大声でもめているので他の乗客から睨まれた。

他人のふり、他人のふりつと。

そんなことを気にしない乙女三人組は未だもめ続けている。

一方、祐樹は自分の隣が拒否られたので自分の鞆からアニメ雑誌を
取り出し2次元ワールドへ行つた。沖縄までには戻ってこいよ。

大輔は精神統一をしている、と思つたが寝ていた。

茜先輩はゲームに熱中。オラー！クソツとか言う声を出している。姉

さんと少し似ていた。

出発まであと、30分くらいあった。

乗客口から黒いスーツを着た男たちが入ってくる。

10人程度の連中だった。

「今からこの飛行機は我々が支配する！抵抗すれば殺す」
乗客全員が凍りついた。

飛行機で和也の争奪戦！？

人生でハイジャックなんてありえないと思っていたが、現に今起きている。

全員が銃を取り出した。

どうやら本当にハイジャックされたらしい。

二人ほど、外へ出た。

どうやら、出発までに邪魔者が来ないように見張りをするといいところだろう。

大輔はこの期に及んでも寝ている。こういうときだけ羨ましいよ。いつもはうるさいくらいに明るい茜先輩もさすがに静かになっている。

祐樹は、雑誌で顔を隠している。情けないと思いたいがこれが普通の反応なのだろう。

黒い連中がごそごと話している。

「おい、その3人来い」

銃を向けているため素直に従う。

するとリーダー的な存在の男が、

「あー、こいつら人質ね。何かしたら1人ずつ殺すから」
後ろの男たちが下種な笑い声を上げる。

オレは足がすくんで何もできない。

自分の無力感を感じ、情けなさに死にたいと思った。

悔しくて、悔しくて自分を責めた。

すっかり優奈たちは青ざめている。無理もない……

オレの頭の中に姉さんの声が響いた。

- 勇気を出せ！絶対に逃げるな。

昔、姉さんに言われたことがある。

そうだ、オレがやるしかないんだ。

オレは立って、男たちの元へ向かう。

「何だてめえ」

「人質ならオレがなる。だから3人は解放してください」
後ろの男たちが、どうする？と聞いていた。頼む！

リーダーがオレの前に立ち、

「駄目だね！お前なんか意味ないからな」

オレは無意識にリーダーを殴っていた。

部下数名が後ろから撃とうとしてきた。だが、

「ウオラア！！！」

大輔が一瞬にして気絶させた。

「お前だけいいところは与えん」

だけど、五人で銃を構えられた。もう終わりか、畜生……

だけど、終わりじゃなかった。見張りがやられて誰かが入ってくる。

「貴様ら、誰に手を出しているんだ？」

長くて黒くてストレートな髪。この巨乳。男勝りな性格。

遙姉さんだった。

遙姉さんは男を全滅させた。

数分後、警察が来て男たちを逮捕した。

「でも何で姉さんが来てるの？」

「うむ。伝言を忘れていた。ゲーム+攻略本で」

それだけ……？

まあ、来てくれて助かった。

優奈たちが解放され、恵が一番で抱きついてきた。

「怖かったよお」

泣いていた。

オレは、そっと包み込むように抱きしめた。

飛行機で和也の争奪戦!?

騒ぎは収まったものの、優奈たちはすっかり青ざめている。無理もない。命の危険性があったのだから。

オレたちは、最悪のスタートを切った。

これから、楽しめるのだろうか。

恵は、ずっと泣いているし、紫苑先輩は俯いている。優奈は普段と変わらないような表情を作っているが明らかに無理をしている。

どうにか、元気にしてやりたい。慰めてもまり意味がなかった。

結局、座席はオレ、祐樹、大輔の順で座った。そして遠くはなれて前に優奈たちが座っている。

茜先輩は、ずっと慰め、元気付けようとしている。自分だって、かなり怖いはずなのに。心から尊敬するし、茜先輩の強さを知った。

「どうにかして優奈たちを元気付けられないかな．．．せっかくの沖縄をこのまま終らせるなんてつまらない。どうにか思い出に残したい」

「でも、どうする？あんなことあったら普通すぐには立ち直れないぞ」

普段ふざけている祐樹がここでは真面目に言っている。

こんな感じで、ずっと考えていた。元気付ける方法を。

しばらく沈黙が流れた後、大輔がいきなり、

「そっだ！」

と、大声を発した。

周りの乗客からの視線が集まる。前の優奈でさえ、振り返った。

大輔は、小さい声で「すみません」と言って身を縮めた。

「で？何か言い案でも見つかったか？」

俺は待ちきれなくて聞いた。

「沖縄には、この時期ある時間にだけ見られる海があるそっだ。それは大変絶景らしい」

それだ！とオレと祐樹は顔をあわせた。だけど、祐樹はすぐに難しい顔をしてしまった。

「どうした？」

オレが聞いてみると、手を顎につけたまま、

「その絶景つてのはどこにあるんだ？場所わかってなくちゃ意味ないし、時間とかもわかるのか？」

「そうだ．．．」

時間とかがわからなければ意味がない。

いくら沖繩とはいえ広いのだから。

だけど、大輔はいきなり笑い出し、

「ちよつと待て、これを使えば一発で．．．」

鞆をあさりだし、中から携帯を取り出した。

「これで、検索すれば出てくるだろう。ふふふ、最新のスマホだぞ」

最新のスマホをとんでもないほど早く使いこなす。とても武術を嗜んでいるとは思えない。

こいつこんなところだけ現代人なんだよなあ．．．

大輔が検索してから数分後、やっと口を開いた。

「だめだ。時間はわかったものの場所までは出てこない」

少しがっかりしたが、時間がわかっただけよかった。

「何時から見れるんだ？その海は」

「夕方の4時50分〜5時00分の十分間だけだ」

オレは時計を見ると、もう昼近くになっていた。

「場所がわからないんじゃない．．．」

祐樹が言った。

「わかんないなら自力で探すまでだ！」

沖縄の絶景・皆の想い

沖縄に到着してから一時間。
手がかりゼロ。

「海なんてどこも同じじゃないのか？」

独り言を言っても当然返ってこない。

オレは到着してからすぐに、用事があると言ってこっちに来た。
まさか沖縄に着てまで絶景探しをするとは……………
でも、皆の為ならいくらでもしよう。

今、この絶景を探してるのは男3人だ。

でも、茜先輩には教えた。

見つけたら連れてきてもらうために。

「もしもし？祐樹？なんか手がかりあったか？」

この会話を30分おきにしていた。

でも返ってくる返事は同じ。

「なんも」

大輔にかけても同じだった。

「まだ見つかつてはおらん」

これしか言ってこなかった。

オレは、現地の人たちに聞き込みをする。

もう30人近くの人に聞くが、「知らない」「聞いたことがない」

としか言われなかった。

このまま海の近くにいても意味がないのでオレは町の資料館などの
施設に行くことにした。

いろいろ聞き込んで早3時間。

一向に手がかりはなかった。

するとオレのズボンのポケットから振動が伝わる。

電話が掛かってきた。

「もしもし？」

見たことのない番号だった。

「あ！もしもしい？和也君？アタシ茜だよー」

第一声目でわかりましたよ。

「そっちはどお？」

「すみません。まだ何も．．．」

茜先輩はちよつと黙ったが、

「そっかあ。あんま無理しないでね？」

心配してくれたのがありがたかった。

「はい。そっちはどうですか？優奈たちは．．．」

ちよつと溜息をついて、

「うん。皆バラバラで散歩行っちゃった。やっぱり、相当元気ない

よ．．．」

この一言がオレをも元気なくした。

現状を説明され、急がなければと思った。

思ったより時間が早く感じる。

「わかりました。ありがとございます。何かあったらまた連絡し

ますので」

うん、と言って電話が切れた。

沖縄の絶景・皆の想い

もう時間は4時を回っていた。

いくら調べても、何の手がかりもない。

「本当にあるのかよ．．．．．」

もう30人以上の人に聞き込みをしたが、誰も「知らない」「聞いたことない」としか答えられなくて、あるのかどうかさえ疑わしい現状だった。

祐樹と大輔も同じで、まったく情報はなかった。

オレは、無意識に海へと向かっていた。

今の海は、夕日が差し込みとても美しかった。これ以上美しい海なんてあるのかと思うほどに。

「これじゃないのか．．．．？」

だけど、何か違う気がする。この海のことだったら誰でも知っているはずだ。

やはり、ずっと歩いたり調べたりしていると心身ともに疲れがくる。オレは、溜息しか吐いていなかった。

やる気を出させるために、頬を両手でバチンツと叩く。痛かったけど、優奈たちが味わった痛みはこんなものじゃない筈だ、と自分に言い聞かせて再開する。だけど、もう時間はあまりなかった。

もう少し調べよう、と思つて1時間、2時間と時間が過ぎていく。辺りはすっかり薄暗くなつてしまった。時計は7時を回っている。

すると、まだ遠くだが船がこちらに戻つてくるのが見えた。

「ここでラストだな．．．．」

船は遠くで気づかなかつたが、近くに来るとかなりの大型でここなら情報があるかもしれないと希望を抱く。中から一人の青年が出てきて、オレに気づいたようで「どうした少年？」と声をかけてくれた。

「あの、沖縄の海に絶景が見られると聞いたんですけど、何か知りませんか？」

うーん、と言ったが「すまないがわからないな」と言ってしまった。「そうですか．．．ありがとうございます」

ちよつと待つてくれ！と呼び止められた。

「オレはまだ沖縄で漁を始めたばかりなんだ。だからオレはわからないけど先輩達ならわかるかもしれない」

オレの心にまた希望の光が一筋差した。

「本当ですか！？お願いします！」

「おう！じゃあ、ついてきな！」

オレが連れて行かれたのは、倉庫のような場所で中はかなり広かった。たくさんの漁師がなにやら仕事をしている。中に入ると、潮のにおいが鼻を刺した。

入ったとき、視線を感じたが青年が事情を説明してくれた。

「僕は、沖縄の絶景を探しています！海にあると聞いたんですけど何かご存知ありませんか？」

倉庫に響き渡るように大声で言った。だけど、返ってくる返答はやつぱり今までと同じで「知らない」「わからない」「聞いたことない」というものだった。

またか．．．．．と思ったが一人、年配のおじさんが「俺は知ってるぜ」と言ってくれた。

沖縄の絶景・皆の想い

「俺知ってるぜ」

この言葉を聞いたとき、嬉しさで飛び上がりそうになった。

「教えてください！お願いします！！」

年配のおじさんは手を前に止めるように出した。

「まあ待て。今日はもう遅い。明日またここに来てくれ。そうだな
．．．１０時頃でいいだろう。いいか？」

今日教えてくれないのは不満だが、まあしょうがない。せつかくの手がかりを無駄にするわけにはいかない。ん？待てよ．．．．もう遅いつて言ったか？

時計を見ると１０時を回っていた。

「わかりました！ありがとうございます！」

オレはダッシュで帰ることにした。

ホテルに入るとロビーで優奈が怒りの顔をあらわにして待っていた。「遅い！どこ行ってたのよ！！！」

「悪い。道に迷ったんだよ」

優奈の眼差しは真剣すぎて、苦しかった。でも言うわけにはいかなかった。

それよりも、優奈がいつも通りでよかった。心底安心する。

「もうとっくに皆寝てるわよ」

そうか、優奈は待つててくれたんだ。

「優奈。ありがとう待つててくれて」

優奈は顔を赤らめて、

「し、心配なんてべ、別にしてないわよ！あーもう！死んで生き返れー！！」

思いつきり脇腹にひじを食らわされた。でも、いつも通りでよかった．．．

「そういえば和也何も食べてないでしょ！？これ落ちてたから食べ

なさいよ！」

落ちてたって……しかもオレの好物ばかり。作ってくれたんだな。

「わざわざ作ってくれるなんてサンキュー」
動揺した優奈は、

「作ってない！！落ちてたのよ！！」

はいはい、と部屋に持って行って食べる。

なんか、涙が出そうだった。

沖縄の絶景・皆の想い

優奈が作ってくれた夕食を食べて、ベッドに入った。かなり疲れていたのに、中々眠れなかった。多分それは、あのおじさんが教えてくれなかったからだろう。早く10時になってほしい。

結局、ほとんど眠れず朝を迎えた。まだ6時前後で、しょうがないから外へ出た。

やっぱり、向かうのは海で少しでも早く向かいたかった。

辺りはまだ薄暗くて朝の海というのも不気味なものだった。

オレは、昔のことを思い出していた。

そう、渚といた。あのときを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6464z/>

甘くて苦い少女たち

2011年12月27日23時50分発行